

マンハッタンの憂鬱

横田 健次



マンハッタンの憂鬱

横田 健次



著者・発行者
横 田 健 次

昭和11年……長野県岡谷市生まれ

昭和35年……慶応大学経済学部卒業，電通入社

昭和46～50年…電通ニューヨーク支局勤務

現在 電通国際局勤務（電話 03－544－5903）

現住所 〒260 千葉県千葉市みつわ台4－18－10

マンハッタンの憂鬱

昭和59年9月発行

頒価 1,200 円

編集・制作 朝日新聞東京本社
朝日出版サービス

〒104 東京都中央区築地5－3－2

電話 03－542－1436

印刷・製本 凸版印刷株式会社

は
じ
め
に

もう十年以上前になるか——一九七二年三月、「世界の都市Ⅱニューヨーク」で日本人殺害事件が起こった。それは、日本のある広告会社の社員で、東京本社から海外研修生として選ばれ、ニューヨークをはじめ世界の都市を巡り、研修テーマである「日本のPR」を究めていた、研究熱心で、もの静かな壮年の男であった。

ニューヨークは当時「世界の犯罪都市」とまでいわれ、麻薬、ポルノ、売春、万引き、強盗、殺人など数知れず、市当局はこうした事態を憂慮しながらも、財政難から改善への対策にはほとんど手を打っていなかった。

蔵原醇の殺人事件はニューヨークで起こった初めての日本人殺害事件であった。私はこの事件の約一年近く前から会社のニューヨーク支局駐在を命ぜられ、ニューヨーク生活をしていたが、事件は私と彼とが別れてわずか二時間後に起きただけに、私にはショックであった。

ニューヨークがこうした犯罪を一掃し、経済、文化、芸術の都として人々があこがれる「世界の平和都市」に再興することを願って、私は一大キヤンペーンを企画した。日本で悲報に接した蔵原夫人から当時のニューヨ

はじめに

ヨーク市長リンゼー氏に訴えの手紙が送られ、市長からも丁寧な返事が日本に届けられた。朝日新聞がこのことを写真入りで大きく扱った。ニューヨーク市は本格的に市の浄化に乗り出した。一年後、統計的には確かに犯罪は減った。私は、この一連の過程をすべて裏方としてとりしきった。しかし、このことは会社にとって「好ましくない」ことだった。「真の人間か、会社人間か」サラリーマンとは難しいものだと言感する。

本稿はこの事件の概要を語り、その記録を描いた。

では、何故この時機にこの事件をまとめなくてはならないか――

読んでいただければ分かるかもしれないが、当時の蔵原醇の子供は五歳と三歳という幼児であった。したがって、一般的にはこの事件の詳しい意味や事情を理解するはずがなかった。蔵原夫人が当時、リンゼー・ニューヨーク市長への手紙の中で書いたように、「この子供たちのニュー・ヨー

はじめに

に対する夢をこわさぬよう、ニューヨークを良くしてもらいたい」という願いと、「この事件のいきさつはこの子供たちが成人した時に語って聞かせる」という責任を、すでに事件から十二年たつて子供たちも成人に近づいたこの時期に果たさねばならないのではないかと私は思い立った。このことは私自身が事件発生時から常に心にいだき、気になっていたことであつた。

当時、幸か不幸か蔵原醇の身近にいたものにとつて、事件の概要を語るのは心底からつらい。しかし、以上の事情から不肖の私がやらなくてはだれもその人はいない。その意味でこの稿はフィクションは全くなく、すべて真実の記録である。私にとって、つらい苦しい記録であるが、この稿を蔵原未亡人とお子様にささげ、お子様の健やかな成長を心より祈りたい。

目次

はじめに

“He might die…….”

その日

黒い影

その後

何か訴える機関は……？

リンゼー市長様

翻訳、そしてタイプ

9

15

28

35

56

63

69

一日四千通／

82

市長から日本の未亡人へ

88

日本では……

95

先輩に感謝

115

蔵原夫人N Y滞在記

123

知床の岬に……

153

装幀・装画／つのだ さとし

“He might die……”

電話のベルが間隔をおいて、ゆっくりと鳴った。……三月に入ったとはいえ、冬のきびしく、長いニューヨークに小雪が舞い、底冷えのする週末の金曜日、私はある会合に出席し、ちらちら降る小雪の中を“酔いざまし”に歩いて、半時間ほど前に帰宅し、週末の気楽さから、これから遅い夜食でも、と思っていた。

時計は二つの針がちょうど12の数字に重なるうとしていた。“新村君だろう”と、私はとっさに思った。新村君は当時ワシントン郊外のメリーランド州に住んで居た会社の海外研修生の一人であったが、アメリカで電話料金の安くなる夜の十一時すぎに、ニューヨーク支局の駐在員である私の自宅へ電話してくることがしばしばあ

ったからである。

——電話に出た妻がちょっと緊張した面持ちで「領事館からです」という。

リビング・ルームの一角においてある電話台までの数歩の間、「領事館から？　この夜中に？」と、私は口の中でつぶやきながら、何のことだろうかと考えたが、すぐに思い当たる何事も得られなかった。

電話の相手は低く、押し殺したような声で「私は日本領事館の田中ですが、電通にクラハラさんという人がいますか」……「ハイ研修生ですが……」

領事館の田中氏は日本へ仕事で行くアメリカ人のビザのことをはじめ、色々なことで何回かお会いして、顔なじみになっており、住まいも近くであったのでよく知っていた。……「そのクラハラさんが刺されたらしいです……」「エッ、なんですって」私は意味がわからず聞き返した。「クラハラさんが刺されて重体らしいのですが、私はいまバスに入っていましたし、詳しいことはよく分かりませんので、マンハッタンの「古都」という日本レストランに電話して、そこにいる東京書店の加藤さんという人に詳しい話を聞いてみて下さい。電話番号は……」と伝え、電話は切れた。

田中氏の声は「さも迷惑」といった調子で私には意外に思われた……。

“He might die……”

私は受話器を置くのも忘れ、いま田中氏の言った言葉を反すうしてみた。——“刺された？ そんなばかな！”——彼は私とわずか四時間前に別れたばかりではないか。……間違い、何かの間違いにちがいない。……しかし、もし本当とすれば、どこを刺されたのか。足？……腕？……。「刺されて、全治○週間とか○カ月とか」よく新聞記事に出るあれか……。それより、どうして、なぜ、刺されたのか……。私は、半信半疑、教えられた電話番号を回した。回す手が寒さと緊張で小さざみに震えているのを意識した。電話のベルが何回も鳴っているが、相手は出ない。……“おかしいなあ、番号を間違えたのかな”“おちつけおちつけ”と、はやる自分を抑えながら、ゆっくりもう一度受話器を置き、番号を確認して今度はゆっくりと回した。

……電話口から勢い込んだ、かん高い声が耳をついた。「小岩井さん、すぐ行動して下さい。（なんと“電通”的なヤツ）蔵原さんがやられたんですよ。……ちょっと待って下さい」電話が代わった。電話の声も英語に変わった。“Do you know Mr. Kurahara?” ニューヨーク警察の刑事である。「ミスター・クラハラは今日どこにいたか？ 彼と別れた時間は？ 場所は？……」。そして年齢・家族のこ

と……など、その刑事はやつぎばやに蔵原のことを私に質問してきた。私はそれらの質問に、うまくない英語でも丁寧に答えながら、「ああやはり本当なのか、それでは蔵原はいまどこに、どうしているのか、刺されたあとは？……」刑事が答えた。
“He might die (彼は死ぬかもしれない)……”その一言は、冷たい響きをもつて私の身体中を駆けめぐり、ついには心臓に突き刺さるような鋭い一言であった。
時計は午前〇時二十分をさしていた。すぐ森田支局長の自宅に電話して、事情を手みじかに説明した後、車を出した。

雪はいつしかやみ、雲の間からわずかに顔を出した月が、路面を白く照らし出していた。マンハッタンのハドソン河に沿ったウェストサイド・ハイウエーを私は精いっぱいアクセルをふかしながら、「刺されるとはどういうことなのか。いや、あいつは殺したって死ぬような男じゃない。どうか生きていて欲しい。大丈夫、大丈夫」と、とりとめのないことを自分に言い聞かせた。

約二十分後、刑事から教わったマンハッタン百十四丁目のセント・ルカ病院にいた。何事もないような静けさ。正面玄関はすでにしまっているで非常口より入る。入り口の門扉の上に黒人の子供が数人たむろしていた。彼らに聞いてみた。「日

"He might die....."

本人がこの病院に來た？」「日本人かどうか知らないが、二、三時間前に、ここへ運び込まれた男は、ダメだった。」——張りつめていた身体中の力が一瞬にして、音をたてて崩れ落ちていくのを私は感じた。心は、はやった。

病院の受付へ走った。受付では白衣を着た黒人の女がひとりでいた。彼女があちこちに電話して担当の医師を探してくれたが、どこへ電話しても、この時間では分からないようだった。私はイライラしてくる自分を感じた。時計は午前一時を回り、こんな時間でもけがや病気の患者が非常口から運び込まれ、病院に全くといい程縁のない私は、その不気味さで不安がつのる一方であつた。……ようやく、医師の居場所が分かつたらしかつた。しかし、その医師の来る時間の経過がいかにも長かつた。

細ぶちの眼鏡をかけた白衣の男が現れた。しかし、その白衣の左下半身の部分が大きく、真赤に染められている。——ああ、やはり——その人は低いが、よく響く声で「私はドクター・サリバン。ミスター・クラハラは十時十五分ごろ病院へ運び込まれた。心臓、胃の二カ所（これはその後の検視で心臓だけに訂正されたが）をナイフ状の凶器で刺されており、すでに意識はなかつた。絶望的な状態であつたが、

ただちに心臓を切り開き、心臓マッサージをはじめ、病院としては考えられるあらゆる手を尽くした。しかし、……彼の意識はとうとう戻らなかった。死亡確定時刻は十一時三十分。以上だが、大変お気の毒である……」と、一気に言って、その大きな目を伏せた。